

物語文の表現と文末形式

——芥川作品を通して——（上）

藤 井 俊 博

一 本稿の目的と資料

物語や小説の文章を構成する各文を、物語文と称する。筆者は、これまで古典作品の物語文を題材に、視点論の立場から表現内容を四分類し、物語文の表現内容と文末形式の性質を検討してきた^①。本稿では、現代語における物語文を取り上げ、筆者の分類した表現内容が具体的にどのような文末形式として現れているか、また、物語の文章において中心的な表現内容となるものはどのようなものであるかという点について、実態調査を通して大まかな見通しを付けておきたい。ここでは、芥川龍之介の作品から「羅生門」を中心として取り上げ、比較のために、芥川作品のいくつかのジャンルから取り上げ、「六の宮の姫君」（説話物）、「杜子春」（童話）、「秋」（現代物）を加えた四作品を調査する。

二 従来の研究と本稿の方法

これまで、物語文の表現内容は文末形式と関連づけられて論じられている。一文の表現内容は文末において現れやすいからである。日本語の物語文の文末形式に見られる顕著な特徴として、過去形と現在形が混在することを取り上げる研究が多い。物語文で用いられる過去形と現在形の意味については、牧野成一（一九八三）、曾我松男（一九八四）、池上嘉彦（一九八六）、永尾章曹（一九九三）、工藤真由美（一九九五）らの論がある。これらの研究において、過去形の「た」は話の骨組みを語るのに用いられ、現在形は副次的内容や評価を表す表現において用いられるという点は、諸家一致して述べるところである。

現在形の意味としては「歴史的現在」が代表的なものとしてあげ

られることが多い。池上嘉彦は、物語文を「語り」と「評価」（「外的評価」と「内的評価」）に大別し、いわゆる「歴史的現在」は内的評価の一つで、出来事を前景化するものであるという。また、「歴史的現在」には「無徴の時制」の延長と考えられるものがあるとし（冒頭の過去を用いれば、あとは同様として現在形にできる性格を言う。牧野成一にも指摘があるが、古典の物語文に多く見られる用法である。）、表現効果として現場感を与える面を指摘する。「歴史的現在」は通常クライマックス部分など焦点を当てたい場面で使用される場合が多いが、曽我松男は、主筋的内容であっても目の前の事象とするために「る」を用いる場合があるとしている。「る」をとる場合は「た」の場合と異なる効果として現場感が出る点や、場面の展開が逐次的になるなどの点が文体的効果として指摘でき、池上嘉彦も述べているように、現在形の「歴史的現在」は、そのような文体的効果をねらったときに選択されるものである。また、「歴史的現在」の場合は、その場面の動作的な側面に焦点を当てた表現と言えるが、一方で、現在形で表される内容は、状态的な側面に重点を置いて、その他に場面の細かな状況や背景を詳述する場合も多い。工藤真由美は、地の文を「外的出来事」「内的意識」「解説」に三分し、「外的出来事の提示部分（典型的かたり）」の非過去形は「演劇的眼前描写性」を持つこと、「内的意識の提示

部分（内的独白）（描出話法）」の非過去形は人物の「内的視点」による表現であること、「解説部分」の非過去形は非アクチュアルな「背景の出来事提示部分」になることなどを指摘している。これに関して、池上嘉彦は、現在形で表される場合として、

状態を表す動詞・直接話法の「言う」・敬語の動詞・「のである」「のだ」・語り手の評価を表す語句

を挙げ、牧野成一は、

否定形「ない」による「状態」、「のだ」による「価値評価」、会話引用の伝達動詞、「すると」のあと

を挙げている。また、永尾章曹は、形式の面から「である」など多様なものがあるとする。これら動作的側面や状态的側面は、池上が言う「副次的内容」、牧野成一が言う「絵画的なもの」になるものである。すなわち、主筋的内容が、時間の展開を大きく進めるものであるとするなら、場面の大きな展開を止めて、細かに動作を描写したり、静止的に状況を描写・説明する点に現在形の性格が認められる。

一方、過去形には、場面を時間的に展開させる役割が指摘される。池上嘉彦は他動詞的な内容が、牧野成一は、空間の移動の内容が多いとしているが、いずれも場面を大きく展開させる機能を持つ。また、永尾章曹は「発言語彙」「心情語彙」等の内容を指摘する。こ

れらは、場面を時間的に展開させる点で共通する。

このような過去形・現在形の意味を踏まえつつ、筆者は、これまでに物語文の表現内容を視点論の立場から四分類し体系的に捉える試案を示した。各項目の詳細な説明と古典作品での文末形式については、藤井俊博（二〇〇二）に譲ることとして、ここでは過去形・現在形との関わりから述べておく。ここでは、各分類の後ろに、矢印で、右に示した従来の指摘との関連を略記しておいた。

〈分類〉

I 出来事の筋を俯瞰的に叙述する場合で、語りの現場に視点を置いて描く表現（過去形）

↓ 従来「他動詞的な内容」や「空間の移動」あるいは「発言」などの過去形が指摘された。

II 語り手が出来事の現場に視点を置いている場合で、人物の動作を実況的に叙述する表現や、人物を解説的に描く表現（過去形・非過去形）

（A）語り手の視点が出来事の現場へ「接近」し、現場の時間の流れに沿って継起的に叙述が進められる場合（歴史的現在）による非過去形）

（B）継起的な事件の展開を止めて、出来事の現場に「接近」したまま、その事柄の「状態」を描写したり、内容を「解説」したりする場合。過去形・非過去形ともにあり得る。

↓ 従来（A）は「歴史的現在」、（B）は「状態の描写」として指摘された。

III 人物から見た現場の様子や人物の内的心情・思考を叙述する場合で、語り手の視点と登場人物の視点とが共有化された形で描く表現（描出話法）に相当・非過去形・過去形ともにあり得る）

（C）視覚・聴覚を描く動詞などで、人物によって知覚された周囲の状況を描き出す場合

（D）感情・思考を描く動詞あるいは形容詞などで、語り手が人物の感情・思考を描く場合

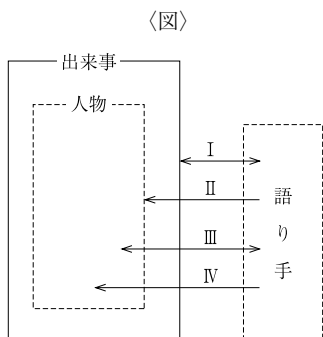
↓ 「感情・思考」の内容は、「た」で示されることも多く、従来Iで扱われたが、視点による表現内容の差に基づいて（D）として特立する。「描出話法」として（C）とともに一類とする。

IV 人物の内的心情・思考・発話そのものを叙述する場合で、人物の視点に完全に移動して描かれる表現（直接話法による会話や

心話による叙述内容。「」で括られた発言内容そのもの

↓従来「言った」はIあるいはⅢD、「言う」はⅡAとされた。ここでは「」で括られる「発言」内容そのものを対象としてⅣとして扱う。

これら四類と文末形式との関わりでは、Iは過去形が用いられる傾向が強いが、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは過去形を採るという制約は弱く、作品によっては多く現在形に傾く場合が出てくるといって質的な違いが見られる。視点論の立場から言えば、Iは、話の筋を進める表現として話し手の視点から表現されるために「た」が使われるのに対して、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは、時間の展開を止めて語り手が物語の現場に身を置いた表現となりやすく、



物語文の表現と文末形式

いちいち語り手の視点に立ち戻って表現する必要は必ずしも高くないため、現在形が現れやすくなるということが考えられる。すなわち現在形は現場に視点を置いた表現に現れやすいのであって、それはⅡA「歴史的現在」の用法

に典型的なものであるが、ⅡB「状態」「解説」の場合も現在形が多いのも実は視点が現場にあるためである。ⅡBは、池上の言う「状態」「評価」や牧野の言う「状態」「価値評価」に対応するものである。また、現場に身を置いた表現という点で、登場人物の側に入り込む表現(Ⅲ)、あるいは会話文のような登場人物の視点そのものの表現内容(Ⅳ)も現在形になりやすい。会話文の場合は、すでに池上氏や牧野氏にも現在形になりやすいという指摘がある。実際、「Aは、『会話内容』と言った。」のように過去形で表現する場合の他に、「Aは、『会話内容』と言う。」のように現在形で表現したり、「Aは、『会話内容』のように述語を省略したり、『会話内容』のように会話文のみを投げ出す形も可能である。これらいずれの引用形式を使うかは文体的選択の問題であり、作品の特徴が現れる側面でもある。Ⅳは、本来『会話内容』の部分すべてが対象となるが、本稿では、文自体が会話文を投げ出したものである『会話内容』のような場合をⅣとし、文の一部になる「Aは、『会話内容』と言った。」はIとして、「Aは、『会話内容』と言う。」はⅡAとして扱うことにする。

三 調査方法

物語文の表現内容は、前節に示したように、現在形を採るか過去

形を採るかという点と関連を持つ。しかし、過去形で示されるのは、語り手の時間的な把握、あるいは語り手の視点という極めて限られた内容だけである。現在形がⅡ・Ⅲ等で用いられる場合は、ⅡAの「歴史的現在」が、他の用法に比べて実例の多くを占めるかどうかとも疑問である。そこで、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのような多様な内容に対して、単に現在形が現れやすいというだけでなく、述語部分にどのような表現形式が現れているかその内実を明らかにしていかなければならない。本稿では、文末形式にどのような表現があり、それによってどのような表現内容が示されるかという実態について記述することを目的としたい。

ここでは、本稿で扱う文末形式について、その大枠となるものを記述しておく。まず、表現内容の分析において文末形式に注目する場合、従来、過去形・現在形のようなテンス形式が注目されてきたが、動詞を述語の中核とする場合ならば、

- ① 「動詞」(現在形)「動詞+た」(過去形)
 - ② 「動詞+ている」(現在形)「動詞+ていた」(過去形)
 - ③ 「動詞+のである」(現在形)「動詞+であった」(過去形)
 - ④ 「動詞+ない」(現在形)「動詞+なかった」(過去形)
- のように記述することができる。実際の作品では、動詞の下に、「ている」というアスペクト形式が付随していることが多い。この

他、動詞に加わるアスペクト形式として「動詞+はじめる・動詞+はじめた」「動詞+てしまう・動詞+てしまった」などを記述することもできるであろう。さらに、判断や意志などを表す表現として、「動詞+らしい」「動詞+う・よう」などを加えることができる。

- 一方、名詞を述語の中核とする場合の文末の基本形式としては、
- ⑤ 「名詞(が) + いる・ある」(現在形)「名詞(が) + いた・あった」(過去形)
 - ⑥ 「名詞+である」(現在形)「名詞+であった」(過去形)
 - ⑦ 「名詞(が) + ない」(現在形)「名詞(が) + なかった」(過去形)
 - ⑧ 「名詞+でない」(現在形)「名詞+でなかった」(過去形)
 - ⑨ 「『会話内容』」

のように記述することができる。⑦⑧に準じるものとして、「形容詞」「形容詞+た」なども加えられよう。以上の①～⑨の形式を物語文の文末形式の基本となるものであると考えられる。これらがⅠ～Ⅳの表現内容のどれに用いられるかと言うと、詳しい分析は(下)に譲るが、大きな区分を示すと、

- ①の過去形ⅡⅠに対応する。(動詞が「視覚・聴覚」の内容ならⅢC、「感情・思考」ならⅢDとして扱う)
- ①の現在形ⅡⅡAに対応する。(動詞が「視覚・聴覚」の内容なら

らⅢC、「感情・思考」ならⅢDとして扱う)

②～⑧＝ⅡBに対応する。(動詞が「視覚・聴覚」の内容ならⅢC、「感情・思考」ならⅢDとして扱う)

⑨＝Ⅳに対応する。(発話動詞を使う場合は、文末形式が「た」ならⅠ、現在形ならⅡBとして扱う)

のように対応すると考えられる。大略は、Ⅰ・ⅡA・ⅡB・Ⅳのように特定の形式に偏るものと、ⅢC・ⅢDのように特定の形式に偏らないものに分けることができる。ⅢC・ⅢDは、文末形式ではなく、「視覚・聴覚」「感情・思考」などの動詞を述語とした場合を特別に一類として認めるものであるが、文末形式としては①～④の形式になる可能性がある。実例としては、「視覚・聴覚」「感情・思考」の内容が①～④の文末形式による場合も多いが、本稿では動詞の内容を重視してⅢC・ⅢDとして扱うことにする。また、②～⑧の過去形の場合は、「た」を含んでいる点で①と同様語り手の視点が含まれていると言えるが、動詞の性質や文末形式による表現内容を重視すると、物語文としては①と違う性質を持っていると考える。具体的な考察は、(下)に譲る。

本稿(上)では、最後に、右の①～⑧の基本形式とそのバリエーションが実際の作品においてどのように現れるかを調べ表にまとめておく。(表1)～(表4)は、各作品のすべての文について、各

一文の表現内容を、Ⅰ～Ⅳの分類に従って分類し、かつ、それらが文末形式としてどのような文法形式を採っているかをまとめたものである。ただし、表では現代仮名遣いに改め表記している。

表を作成するのに、名詞に付く場合と動詞に付く場合を区別せず、「～ている」「～てある」「～てしまう」「～はじめる」「～ようとす」などのアスペクト形式、「である」「のである」「でない」「らしい」「う」「ちがいない」などの助動詞やそれに準じる形式について組み合わせとして実際に用いられた表現形式のバリエーションを示した。また、④「動詞＋ない」と⑦「名詞(が)＋ない」は否定的状態を表すものとして「ない」の表記でまとめ、「名詞＋でない」の否定判断を表す形式を「でない」と表記して区別した。このように名詞と動詞とを区別しないのは、④と⑦は、動詞に付くか名詞に付くかの差はあっても、表現内容を決定する要素は「いる」「ある」「ない」にあり、これを用いていけば、「状態」「解説」などのような基本的な表現内容は共通して認められると考えるからである。表では、さらに、これらを大きく「た」を含む形式と含まない形式とに分けて太線で分け、その中をアイウエオ順に並べて挙げている。「羅生門」と「杜子春」は「た」を含まない項目があるが、「六の宮の姫君」「秋」は、ほぼ「た」を含む形式に限られている。なお、各作品の処理において、次の点に留意した。

1 「羅生門」の「であろう」には「だろう」の形を含む。「である」には「だ」の形を含む。

○作者はさつき、「下人が雨やみを待てゐた」と書いた。

○ いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。

2 「杜子春」の「です」は「である」、「でしたから」を「であった」として扱った。「ていました」は「ていた」、「ません」を「ない」とした。「ではありませんか」を「である」とした。

「んでした」は「なかった」とした。「てしまひました」を「てしまつた」とした。「違いありません」は「ちがいない」とした。なお、「杜子春」「秋」では「会話」の項に各々歌一例を含んでいる。

3「省略」としたものは、「古い池に枝垂（しだ）れた桜も、薔（つばみ）を持った事を話しながら」（六の宮の姫君）「青い横（つばみ）がたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。」（秋）のように述語動詞のないものである。

四 文末形式と表現内容

ない	ようとする	でない	ているのである	ている	からである	であろう	である	はじめた	なかった	てしまった	ていたのである	ていた	であった	たのであろう	たのである	た	いたのである		
								1		1						26		I	
	1																	Ⅱ A	
7		3		7	1		21		1			6	1	1	1	3	1	Ⅱ B	
1			1								1	4			1	8		Ⅲ C	
2			1			2			2	1		2	1			3	4	1	Ⅲ D
																		Ⅳ	
10	1	3	2	7	1	2	21	1	3	2	1	12	2	1	5	41	2	合計	

ちがいない	はじめた	なかった	てしまった	ていたのである	ていた	てしまったのである	であった	であった	たのである	た	しまった	いた	
	1		3							53	1		I
													II A
		2		2	1	18	1	1	1	4	1	1	II B
										4			III C
2										1			III D
													IV
2	1	2	3	2	1	18	1	1	1	4	59	1	合計

(表2) 文末形式と表現内容(杜子春)

合計	会話	る(動詞終止形)	らしい	のである
28				
4		3		
56		2		1
18		2		
22			3	
7	7			
135	7	7	3	1

てしまった	ているばかりであった	ていた	であった	であった	ちがいなかった	たのであった	た	
4							58	I
								II A
	1	23	19	1		2	7	II B
							9	III C
		2	2		1		9	III D
								IV
4	1	25	21	1	1	2	83	合計

(表3) 文末表現と表現内容(六の宮の姫君)

合計	会話	る(動詞現在形)	のである・ない	のである	ないのである	ない	ているのである	ている	であろう	である
58										
1		1								
70			1	8	2	11	3	3	3	7
5							1			
3										
34	34									
171	34	1	1	8	2	11	3	4	3	7

(表4) 文末形式と表現内容(秋)

あつた	た	ちがいはなかつた	であつた	ていつた	でなかつた	ないではなかつた	なかつた	なくなつた
I	87				2			
II A								
II B	17	11	4	18	34	2	25	1
III C		13			3			
III D	3	18	1	2	3	1	7	
IV								
合計	20	129	1	4	20	40	3	2

ないであつた	なかつた	のであつた	はじめた	らしかつた	会話	省略	合計
			1				63
1	12	2				1	69
							9
	4			2			20
					22		22
1	16	2	1	2	22	1	183

のであつた	はじめた	ようであつた	ようとした	らしかつた	である	会話	手紙	省略	合計
	2		1						92
								1	115
								1	17
1		2		5	1			1	45
						25	4		29
1	2	2	1	5	1	25	4	3	298